先生がつかんだ宝物
～年度末の子どもたちへの配慮～

まもなく今年度も終わろうとしています。この１年間、子どもたちとのかかわりはいかがでしたか。子どもたちのいろいろな顔をいっぱい見ることができたでしょうか。元気な子どもたちの間に次のような子どもはいないでしょうか。

遅刻や欠席が目立つ子、表情がさえなくなってきた子、不登校（傾向）の子、学習の遅れが気になる子、言葉での表現が得意でない子、直ぐに手が出たり乱暴な言葉の出てしまう子、保健室へ行く回数が増えた子、部活を休みがちになってきた子、トラブルをうまく解決できない子、友だちとのかかわりが得意でない子、勉強にも部活にも全力で頑張ってきたのに何故か最近独りぼっちでいることが多い子、新しい学年に不安を持っている子…等々。

毎日の学校生活の中で、アレッと思ったことはなかったでしょうか。きっとそんな時は子どもから何らかのサインが出ている時に違いありません。そこで、どんな一言をかけてあげられましたか？その時の一言が心に響いたならば、子どもはその一言を決して忘れません。そして、子どもは必ず変わりはじめます。

もしもそのような一言が見つけられたなら、それは先生にとっても子どもにとってもこの１年のかけがえのない宝物です。できるならば、先生が手に入れたその宝物を周りの先生方にも分けてあげてください。特にこの学年でその子どもの担任を終える場合には、次の学年で担任となられる先生には是非お願いします。

また、気になる子どもたち、特に不登校（傾向）の子どもとその保護者には年度末の配慮として次の点に留意していただければ有り難いです。

子どもへ……直接の声かけを通して次年度への夢や希望を語れる時間を持ちましょう
（それが難しい場合には家庭訪問、電話連絡、葉書の活用等）
保護者へ……安心できる人間関係を維持し、進級に対する保護者の不安を減らすかかわりに心がけましょう

大切なのは子どもたちの心が揺れるこの時期に、いつも以上に「一言」を大切に支援をしていくことではないでしょうか。この時期の子どもたちへのかかわりが進級・進学した次の学年にとても大きな意味を持ってくるように思います。

（國坂）

飛んでいる矢は止まっている？
～変化を志向するブリーフセラピーの発想から～

「飛んでいる矢は止まっている」とは、古代ギリシャの哲学者ゼノンのパラドックス（逆説）です。「飛んでいる矢は各瞬間には一定の位置を占めている。位置を占めているものは止まっている。したがって飛んでいる矢は止まっている」という理屈です。何となく反証しにくいところですが、止まっていると思う人はいないでしょう。

「不登校」や「ひきこもり」と言われる児童生徒がいます。押しても引いても動かないので、じっと止まっているように見えます。でも本当に止まっているのでしょうか。長い人生から見れば、飛んでいる矢のように、静止することなく動いていることはまちがいありません。

「あの生徒は不登校で…」とか、「うちにはひきこもりの子がいて…」という言葉を耳にすることがあります。しかし、子どもをこうした名詞で呼ぶと、何か病名のような感じを受け、その状態がずっと継続していくように感じます。「いま学校を休んでいて…」とか「うちの子はいま引きこもっていて…」と「いま」と動詞を用いて言い換えると動きが入り、「いまはこうだが、次はどうなっていくのだろう」という変化の可能性を感じることができます。

困った問題や悩みを聞く相談では、その現状の中にいかに「変化」を創り出すかがポイントです。下手をすると、最初から彼らを何とか「変えよう」と取り組んでしまい、かえって動けなくすることが多いものです。彼らも本当は「変わりたい、変えたい」はずで、それをサポートするには、膠着した現状に隙間を入れて、変化が起こりそうな可能性を感じてもらうことでしょう。

名詞のレッテルを貼らず、この瞬間も刻々と変化しつつある子どもとして見る目が、教師や相談員に必要なまなざしかと思います。

（古市）

（発行者）金沢市総合教育相談センター
所長　澤井　弘
〒920-0852　金沢市此花町2番7号
TEL(224)0874　FAX(263)7830
kyouiku_so@city.kanazawa.ishikawa.jp

第３号

金沢市総合教育相談センターだより

適応指導教室「そだち」通室生 M.Hさん(15才)の作品

平成14年3月1日発行

夢を育てること夢を支えること

金沢市総合教育相談センター　所長　澤井　弘

学校が変わる、学校を変えるという発想でいよいよ完全学校週５日制が今年の四月より始まります。新教育課程を展開するにあたり最も大切なことは、一人一人の子どもが「自分探しの旅」を続け「生きる力」を身につけて自立するよう支援することだと思います。そのためには子どもに夢を持たせたいものです。

夢を持つことの大切さはだれもが肯定するところです。少年時代の夢を一生涯求め続ける生き方もあれば、次から次へと新しい夢を抱きそれに向かって努力を続ける生き方もあります。また時には夢が破れたり、深い挫折感に陥り夢など持ちようがなくなり、意欲を失って自分を見失ったり自暴自棄になる場合も少なくありません。

子どもたちが自分の夢を語り、夢を求めて活動しているのを目にすると、それに付き合っている私自身が明るくなります。今、学校では夢を育てる道筋作りは教育課程で、環境作りに関しては開かれた学校作りという形で取り組まれています。これを子どもたちの夢を育て、それが育ち易い環境作りの視点から三つの提言をしたいと思います。

三つの〝間〟の保証

時間、空間、仲間の三つの間は子どもの成長に不可欠であることはだれもが認めることです。しかしこれを学校、家庭、地域の三者がそれぞれの場でこれらの保証について十分話し合う必要があると思います。三つの間の教育的意義と間の生かし方、連携の仕方について具体的に話し合うことが急務と思われます。

学力の保証

不登校で悩み自分でようやく動き始めた子どもや、社会的に逸脱行為を続けていた子どもが立ち直りを意識し動き始めた時、最初に困難を感ずるのは学習に関する内容です。知識の量もさることながら学び方が分からない、身に付いていないことで再び挫折しそうになります。このような悩みが不登校や逸脱行為に陥った原因の一つと考えられるケースも少なくありません。個に配慮する観点からの教育課程や評価のあり方を求める中で一人一人の学力を保証する努力をしたいものです。

一人の努力・みんなの協力

子どもの夢を育てる土壌作りは学校、家庭、地域でだれかが献身的な努力をし続ける必要があります。本人の努力はもちろんですが、それぞれの場で中心になってくれる人の努力なしにそれは望めません。それとあいまってそれぞれの場でみんなの協力が得られないことは広大な土地を一人で開墾することに似ています。子どもの夢を育てるために、この三つの場で「一人の努力・みんなの協力」の観点から取り組みの内容・方法が検討されることを願っています。

平成13年9月から平成14年1月の補導・「愛の一声」状況

前号に引き続き、昨年９月から今年１月までの金沢市の補導状況をお知らせします。

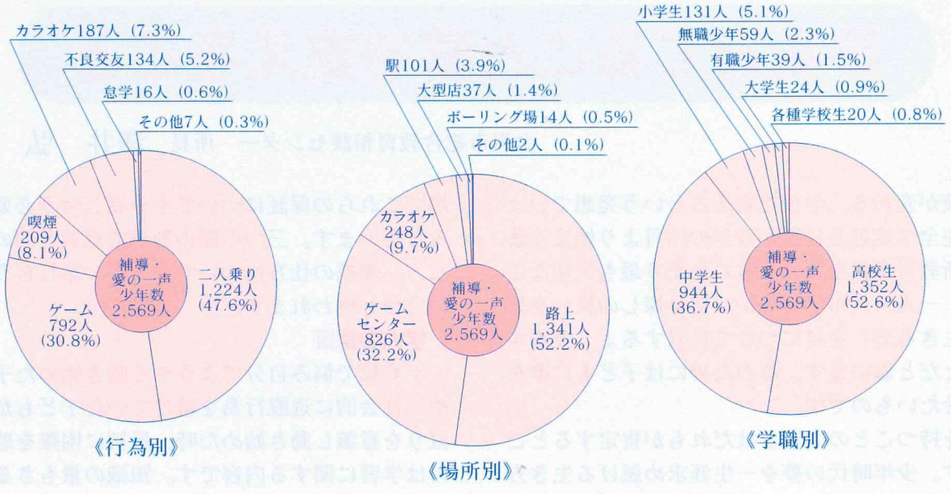
夏季休業以降も小・中学生の「ゲーム場」（プリクラが併設されている所が多い）への出入りが目立ちます。特に「プリクラ」は女子に人気があり、男子より女子の方に多く「声かけ」が必要な状況がありました。

(1) 街頭補導状況

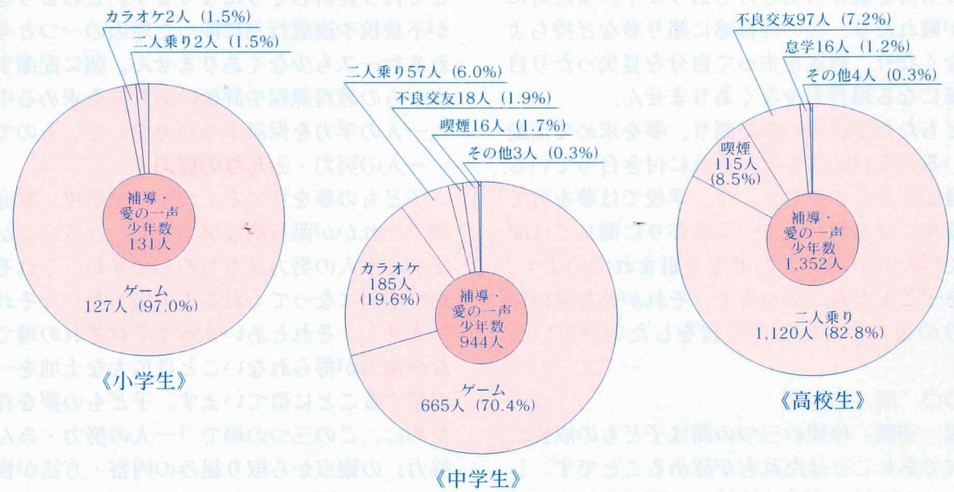
表中の（　）は女子内数

	回数	補導員の従事数	補導少年数	「愛の一声」少年数	補導・愛の一声合計
午前	154回	354人	1　(0) 人	92　(43) 人	93　(43) 人
午後	269回	796人	116 (23) 人	1,941 (1,018) 人	2,057 (1,041) 人
薄暮	72回	279人	24　(4) 人	367　(163) 人	391　(167) 人
夜間	21回	69人	1　(1) 人	27　(10) 人	28　(11) 人
合計	516回	1,498人	142 (28) 人	2,427 (1,234) 人	2,569 (1,262) 人

(2) 補導・「愛の一声」少年の行為別・場所別・学職別の状況



(3) 小・中・高校生の行為別状況



青少年の非行防止と健全育成

地域活動に携わって

青少年の問題行動や犯罪行為の多発等により、「子育ては学校・家庭・地域の連携で」と声高に叫ばれてきました。とりわけ最近の社会情勢から、子育てにおける地域の役割・責任が一段と重要視されております。このようなことから、金沢市内のいたるところで、地域ぐるみでの非行防止や健全育成活動が実践されており、それぞれに多大な成果を収めているのも事実です。

中でも、緑中学校区といった広い範囲を一地区にまとめ、複数の公民館（安原、二塚）が互いに連携し、地域の子どもたちの健全育成に関わっての取り組みは、関係者から高い評価を受けています。

特に、地域の子どもが健やかに成長していけるような生活環境、学習環境づくりを目的に［子どもを育み住みよいまちづくりの会］を設立（平成12年）し、地域住民が主体となり関係機関・団体の協力を得ながら、その目的達成のため日夜努力を重ねているその活動実績が認められているのではないでしょうか。

具体的には一声かけ（挨拶）運動、地域クリーンキャンペーン運動、非行防止啓発用ポスター・チラシ・看板・幟の作成など数多くの活動がなされています。

地域住民や学校からは、「子どもたちに落ち着きと明るさが出てきた」、「子どもや地域のことに強く関心を抱く親が多くなつた」、「保護者や地域の人々の学校に対する意識が高まった」などと満足そうな声が聞こえてきました。

この４月から、完全学校週５日制が実施され、休日が更に増えることにより、ますます地域の教育力に期待が寄せられることとなります。もっと大人は、子どもと接して欲しい、わがまちに愛情を持って欲しいなどと囁かれている昨今です。

自分が何とかしなければ……などと肩肘張らず、「たまにはおいしい空気でも吸って見っか」ぐらいの軽い気持ちで地域に足を向けて欲しいものです。　（地域指導相談員　松音）

街頭補導活動から

■グッドマナーキャンペーンに思う

昨年の11月12日から６日間にわたり、県下一斉に「中高生グッドマナーキャンペーン」が早朝に実施されました。当補導部門も期間中街頭に立ち、登校する生徒に「おはよう！」の声かけと自転車の「二人乗り」禁止の指導を行いました。生徒たちも元気よく「お早うございまーす！」と返事を返してくれ、二人乗りも比較的少なく期間中のマナーは大変良かったと思います。

しかし、我々が通常行っている午後からの街頭補導では、自転車の二人乗りが多く見られ、また、ゲーム場・カラオケボックス等での喫煙も見受けられるので、このキャンペーンも早朝だけでなく、実態に合わせた時間帯や、事前広報なしで実施することも一案ではないでしょうか。

「グッドマナーの向上」は勿論ですが、「非行の未然防止」のためにも。　（補導員Ａ）

■街で出会う子どもたち

毎日繁華街を巡視していると、お互いに顔を覚えてしまう子どもたちがいます。そんな中に中学３年生のＫ君がいます。Ｋ君は私たちを見かけると目の前で煙草を口にくわえます。ふてぶてしいとも取れますが声をかけられるのを待っている様にも思われます。常習なので「アッまた吸っている。早いよ、体に悪いからやめなさい」などといろんな声かけをしますが、Ｋ君一人の時には、学校のこと、先生のこと、友人のこと、家庭のことなどポツポツと話してくれます。でもＫ君のそばに友だちや先輩などがいる時は、突っ張ってまるで別人のようになります。一人一人になると本当に素直な所など見つけることができるのですが、集団では強がって手をやいてしまいます。私たちは子どもたちとほんの一瞬のかかわりしか持てませんが、一声一声気持ちを込めて、これからも声かけを続けていきたいと思います。

（補導員Ｂ）

■嬉しい出会い

先日、嬉しい出会いがありました。いつもの午後の街頭補導で大型店舗へ立ち寄った時のことです。喫煙コーナー、プリクラコーナー、階段付近を巡回中、「今日は、おばちゃん！私ね、今度こそ本当にタバコやめた。やめられた。嘘でないよ。信じて！」と明るい顔で声をかけてくれました。私たちからの「声かけ」はあっても、子どもたちから「声かけられる」ことは滅多にないので少々驚きましたが、真剣な眼差しのＡ子さんを見て、「本当によく頑張ったわね。元気で今のお仕事続けていきなさいね！」と励ましの言葉を送り別れましたが、晴れ晴れしい笑顔がとても印象的で輝いて見えました。

Ａ子さんには高校１年生の時から幾度となく声かけをしてきました。半年もたたない内に学校もやめてしまい、やがて繁華街で大人びた姿の彼女をよく見かけるようになり、相変わらず喫煙もあって声かけをすると、「分かったって！これでも本数減らしとるんやから……」。同じ言葉を何度聞かされたことでしょう。同じ注意を繰り返し受けた子にとってはとても不愉快な思いもあるでしょう。しかし、ほんの少しでも、子どもたちの心に悪いことをしたという気持ちが残ってくれればとの想いを込めて「声かけ」していること、分かって欲しいのです。

私たちの「愛の一声」が子どもたちを諭し、励まし、非行を未然に防ぐ手助けになるように、これからも勇気と自信を持って、母親のような気持ちで子どもたちに接していかなければならないと「声かけ」の大切さを実感し、一人でも多くの子どもたちからＡ子さんのように「おばちゃん！」と声をかけられる補導員でありたいと改めて思った一日でした。

（補導員Ｃ）

契機・転機

初めて出会った頃のAさんは毎日個室で過ごしていて、ほとんど誰とも接することがなく、独りで黙って本を読んだり、ただひたすらテレビゲームをしたりしていました。そんなAさんのそばで私は同じ時を過ごしてみたいと思うようになり、Aさんが過ごしている部屋に一冊の本を持って行くことにしました。ある時、読んでいた本をそのままにしてその場を去ったことがあったのですが、その本をAさんが片付けてくれていたのです。後で「片付けてくれてありがとう」と言葉を交わしたことが契機となり、それから少しずつ話ができるようになりました。はじめはすごく緊張していた表情も日に日に和らいでいき、家族のことや習っているパソコンのこと、また、好きなテレビ番組のことなど、様々なことをAさんの方から話してくれるようになり、私にとっても話を聞くことが楽しみに思えるようになりました。

そんなAさんでしたが、冬休みも間近になった頃、Ａさんが過ごしていた部屋のテレビが故障して使えなくなった時がありました。ゲームをしたいAさんでしたが、他の子どもたちが過ごす場所へは出かけて行くことができず、私たちスタッフと共に活動するだけの日が続きました。しかし、何日かを経るうちに、自分一人で数人の子どもたちが集まる部屋に移動してゲームを始めることができるようになったのです。それ以来、活動範囲も拡がり、その部屋で活動している他の子どもたちにも興味を持ち始め、自分から話しかけたり、集団での活動にも誘うと参加できるようになりました。

同じ時間や空間を共有することでAさんは私を受け入れてくれ、私もＡさんに寄り添うことができました。そして、いくつかの契機や転機に立ち会うことができたのだと思います。

私に多くのことを学ばせてくれたAさんは、今、夢に向かって着々と準備を進めています。

（杉森）

「子ども生活相談」いつも元気にがんばっています！

現在、全国的に少年の非行問題が頻発しており、金沢市においても例外でなく憂慮すべき状況です。このため、今年度は子ども生活相談員を４名増員して６名体制で取り組んでいます。活動目的は次の通りです。

① 学校長等の要請に基づき、反社会的傾向のある児童生徒その他のこれに類似すると認められる児童生徒の保護者に対し、必要な指導及び助言を行うこと。
② 学校、家庭及び地域と緊密な連携をとり、反社会的傾向のある児童生徒等に対し、生活相談及び心の相談を行うこと。

親をはじめ、子どもたちの周りにいる大人たちが今しなければならないことは、徹底して子どもとつきあうことだと思っています。『徹底してつきあう』という中身はどういうことなのでしょうか。それぞれの大人が、それぞれの立場から、しっかり考えながら子どもたちと共に生きていくことが大切だと思われます。子ども生活相談員の振り返りの言葉の中に、何かヒントがあるような気がします。（竹内）

「今日は学校でどうだった？」との問いに「ふつう…」「べっつにぃ～」面談の際のＡ男の言葉。ボンタンの制服や茶髪が許されないことに不満をもち、つい大人を困らせようと荒れる行動に走る子どもたちもいます。これまでにもいろんな形で救援信号を発していたはずなのに、もっと早い時期になんで周りが気づかずにいたのだろうと悲しくなることがあります。「ふつう」でいられることが本当に難しい時代にあって、子どもたちの「ふつう」と大人の「普通」がどこか食い違っているのを感ずるこの頃です。

（相談員Ｄ）

Ｂ子との出会い。それは保健室でごく自然の出会いでした。明るく素直で、初対面にもかかわらず家族や友だち、進学のことなどたくさん話してくれました。話す中で、複雑な親子関係が見え隠れします。居場所のない彼女が求めるものは、有職少年の彼の優しさや彼との絆なのでしょうか。裏返せば、それはそのまま家族に求めているものそのものと感じます。私たち相談員は、そんな彼女らの居場所探しを共にすることと思っています。

（相談員Ｅ）

初めての学校訪問で様々な出来事に直面し、中学校の先生方のご苦労がわかりました。出会う子どもたちを見て、「何でこの子たちが…？」と…。不登校の子どもたちも、一日も早く再登校できればと願っています。

（相談員Ｆ）

新しい出会いがたくさんあります。家庭や学校で、子どもたち・保護者・先生がそれぞれ幾つもの悩みを持っています。その解決に向かって微力ながらも役立てばと、粉骨砕身頑張っています。

（相談員Ｇ）

ケースに携わって、いずれも本人自身の要因が大きいとは思いますが、家族・友だち・先生・先輩…様々な複合した人とのかかわりから受けた影響が今の状況に表れているのだと感じます。本当は、どうしたいのかどうなりたいのか、子どもたち自身も分からないのかもしれません。時間の流れそのものは止めることも早めることもできませんが、少しでも早い時期に本人が「自分」に気づけるように相談員としてかかわっていきたいです。周囲の人たちへの働きかけも続けています。

（相談員Ｈ）

ピアス・お化粧・ルーズソックスのＣ子。授業中はおしゃべり、教科書を開こうとはしない。そんなＣ子「学校では嫌だけど、家でなら…」と家庭訪問しながら一緒に勉強することになりました。それなりに部屋を片付けて待っていてくれる彼女。愚痴の多かった母親が、娘を誉め、認める場面が多くなってきました。「うちの子もやればできるんやね」。少しずつ勉強が分かり、少しずつ自信がついてくると、意欲も出てきだしました。英単語のテストで97点。子どもの力はすばらしい。これだから応援団やめられない！（相談員Ｉ）